

# しなま 観るから バベリ

白鳥建二

×  
佐藤麻衣子

ARTS  
COUNCIL  
TOKYO



# もくじ

- 全盲の美術鑑賞って、どういうこと？ 1
- はじめて美術館に行ったのは、彼女とのデートでした。 \_\_ 4
- ▲ 現代美術との出会いが、わたしを変えてくれた。 \_\_ 8
- 盲人らしくないことがしたかった。 \_\_ 12
- ▲ 白鳥さんに作品を説明しても、ほとんど無反応でした。 \_\_ 14
- 作品を観た人の印象や思い出を知りたい。 \_\_ 16
- ▲ 会話しながら観ると、驚きと発見の連続です。 \_\_ 18
- 饒舌ではないからこそ、自由に考える隙間がある。 \_\_ 20
- ▲ 美術館では自分らしくいられる。 \_\_ 22
- 「わからない」からこそ楽しい。 \_\_ 24
- ▲ しゃべりながら観るのが当たり前!? \_\_ 26
- ▲ なんでしゃべるんだろう？ 白鳥建二 × 佐藤麻衣子 \_\_ 28

白鳥流 会話型美術鑑賞のすすめ \_\_ 38

白鳥流 会話型美術鑑賞をやってみよう！ \_\_ 40

美術館は温かい場でありたい 逢坂 恵理子（国立新美術館長） \_\_ 44

あとがきに代えて 森 司（Tokyo Art Research Lab ディレクター） \_\_ 46

## 全盲の美術鑑賞って、どうしたらいいの？



はじめまして、白鳥建二です。全盲の美術鑑賞者として、鑑賞会などの活動を行っているのですが、「目が見えないのに、どうやって観るの？」とよく聞かれます。「作品を触ったりするの？」「作品を具体的に説明してもらって、その作品をイメージするの？」といった質問もあります。

誰かと一緒に作品を鑑賞するわけですが、まずはその作品がどういうものかを説明してもらいます。ただ、作者のことや作品が描かれた背景といった情報は、話さないようお願いしています。最初にそういう情報を聞いてしまうと、「へー、そうなんだ」で終わってしまうからです。その作品がどういう大きさなのか、どういうものが描かれているのか、どういう色なのか、どういう印象を受けたのか、どう思ったのか……。説明に正解・不正解はないので、主観で好きなようにしゃべってもらっています。

説明を聞いても、僕は具体的な像をイメージできるわけではありません。例えば、赤いコップがあると言われても、視覚の記憶がないので、なんとなくのイメージを浮かべるだけ。私は幼いときからほとんど見えていなかったもので、どれほど正確に説明されても、具体的にイメージはできません。でも、赤色とコップというものの概念は知っているるので、僕なりに理解しています。

ならば、僕は何を観ているのか、何を楽しんでいるのか、不思議に思う人もいるかもしれない。作品を楽しんでいるのもあるけれど、それよりも作品を観た人たちの会話だったり、独特の視点だったり、想定していなかったような方向に話が広がったりすることを楽しんでいます。美術を鑑賞するという時間と場を誰かと一緒に過ごすことが嬉しいのです。

僕は「美術好き」ではなく、「美術館好き」です。美術館という空間、そこで過ごす時間、美術館で起こる出来事、併設されているレストラン、美術館までの道筋、そして鑑賞を終えた後のビール……。そういう美術館に関わるものが大好きなのです。

このような美術鑑賞の楽しみ方を「白鳥流・会話型美術鑑賞」とでも名づけたと思います。

作品が好きというよりも美術館が好きというのは、僕が目が見えないからだと思っていました。でもそうでもないらしい。友人でこの本の共著者でもある佐藤麻衣子さんも同じ思いでしたし、鑑賞会をしてみると、同じような人がいっぱいいることに気づきました。だから、美術館という存在に距離感を抱いていて、あまり足が向かなかった人も、もつと気軽に美術館に行つてほしい。そして、もつと気軽に会話しながら作品を観てまわつたら、もつと楽しいことが起きるよ、というのが僕たちの提案です。美術館がもつと身近な存在になってくれたらという思いで、この本をつくりました。

たどえ目が見えなかつたとしても、一緒に行った人とあれこれしゃべりながら観ると、おもしろい世界が広がるんだ。

美術館って、

ちよつと距離感がある？

美術に興味がなくても、

アートの知識がなくても、

しゃべりながら

観てみて！



さとう まい こ  
佐藤麻衣子

水戸芸術館現代美術センターで教育普及担当の学芸員（アートエデュケーター）を経て、2021年よりフリーランスで活動。令和3年度文化庁新進芸術家海外研修制度研修員。オランダのアムステルダムを拠点に美術館教育の調査研究、執筆、レクチャー、プログラムコーディネーターを行う。あだ名はマイティ。好きなものは星野源とビール。

しらとりけんじ  
白鳥建二

1969年千葉県生まれ。全盲の美術鑑賞者。生まれつき強度の弱視で、12歳のころには光がわかる程度になり、20代半ばで全盲になる。そのころから人と会話しながら美術鑑賞をする独自の活動を始める。以来20年以上、年に何十回も日本各地の美術館を訪れている。水戸芸術館現代美術センターをはじめ、いくつもの場所で講演やワークショップのナビゲーターを務めている。好きなものは音楽とお酒。

**は** じめて美術館に行ったのは、1995年、大学生のころだった。当時は愛知県の日本福祉大学に通っていて、付き合っていた彼女が美術館に行きたいと言いつ出したのだ。彼女とは知り合って4年ほど経っていたのだけど、付き合い始めたのは数カ月前という、少しウキウキする状況だった。

それまで美術館に行ったことはなかった。でも、美術館デートという響きには惹かれるものがあった。一緒に映画を観に行つたこともあったし、コンサートにも行つたことがある。でも、美術館に行つたことは、生まれて一度もなかった。美術館デートをしてみたい。実際は、デートがメインで、美術館はおまけみたいなものだった。その程度の気持ちで、名古屋市の愛知県美術館に出かけた。

開催されていたのは、「レオナルド・ダ・ヴィンチ人体解剖図展」。有名なウィトルウィウスの人体図をはじめ、ダ・ヴィンチが残した人間の身体をスケッチした素描を観てまわつた。

今までまったく絵に興味がなかったのだけど、これがとても楽しかった。彼女と一緒に楽しかったから楽しかったのかもしれないけれど、「盲人のオレでも美術を楽しめるかもしれない」という思いが沸き起こってきた。

彼女がいなくても楽しめるのだろうか――。

それを確認するために一人で美術館に行つてみることにした。デートで行く喫茶店と同じで、彼女と一緒に飲めればコーヒの味はどうでもいい。何を飲んでも楽しい時間を過ごすことができる。でも、一人でコーヒを飲むとなれば、やっぱり苦味や渋味といったものが気になるし、店内の雰囲気や音楽も大事になってくる。それと同じで、一人で美術館に行つて、「全盲であるオレが美術館で何を楽しめるのか」を確認したいと思つたのだ。

美術館に一人で行くにあたり、いくつか設定をすることにした。まず彫刻などの作品に触るのはハードルが高いので、なしにする。また作品の印象や感想を聞くようにする。なぜなら、作者のことや作品のことよりも感想のほうが話しやすいだろうと思つたからだ（実際はそうでもない、ということは後になってから知つた）。そして、断られても一度は押ししてみる。盲人にとつて、断られることはよくあることなので、いちいちめげていても仕方がない。断られるものだと想定しておく、精神的に落ち込まなくてもいいのだ。

友人に情報誌に書かれた美術展情報を読み上げてもらつて、気になるものを選んだ。短い情報を聞いてもよくわからないし、実際は交通の便がいいところ、行きやすい美術館を選んでいただけ。そもそも美術に無知だったので、詳細を聞いたとしてもわからなかった。

はじめて美術館に行ったのは、  
彼女とのデートでした。



めばしい美術展に狙いを定めると、「私は全盲なのですが、作品を観たいです。短い時間でもいいので、どなたかにアテンドしてもらうことはできますか？」と電話をかけた。

最初に電話をかけたのは、名古屋市美術館だった。最初は「そういうサービスはしていません」と言われたのだけど、設定どおり「そこをなんとかお願いします」と押ししてみた。すると、「電話を折り返します」という話になり、きつと上の人に話がまわされて協議されたのだと思うのだけど、結局、観に行けることになった。

そのときに観たのはゴッホの展覧会で、一緒にまわった人が一点一点じっくりと説明してくれたので、すべてを観終わるまでに3時間以上もかかった。

もうヘトヘトだった。説明を聞いてどういふ絵かはなんとなく想像できたのだけど、まだ楽しいというところまではいっていない。ただ疲れただけで終わってしまったのだった。

もう少し確かめないとわからないと思い、次にアプローチしたのは名古屋にある松坂屋美術館だった。電話をすると、一回目ですんなりOKが出て、逆に肩透かしにあつたような気持ちだった。しかも一緒に観てくれた男性が、ものすごくおもしろがってくれた。名前も忘れてしまったのだけど、彼と一緒に観てまわるのが楽しかった。その後何度も松坂屋美術館に行ったのだけど、それは彼に会いに行くようなものだった。彼は毎回、他の同僚を連れてきてくれて、みんな同じようにおも

しろがってくれた。

こういった出会いは度々起こるもので、目黒区美術館の学芸員だった男性もその一人だ。

大学を卒業した後、実家のある千葉に戻って美術鑑賞をする活動が続けていた。当時も、やはり行きやすい美術館に行くことが多かった。池袋の西武百貨店や東武百貨店にある美術館は、駅から直結しているし、インフォメーションに行けば美術館のある階まで案内してくれる。

でも目黒区美術館は、決して交通の便がいいとは言えない。目黒駅で東急バスに乗らないといけないので、少々面倒ではある。それでもわざわざ行くのは、目黒区美術館にその男性がいるから。行けば、間違いなく楽しいということがわかってい

たからだ。彼の何が良かったのだろう。おそらく、教育モードでも、助けるモードでもなく、対等な立場で一緒に鑑賞してくれたからのように思う。

おもしろがってくれたポイントは、松坂屋美術館の男性と目黒区美術館の男性とは違ったのだけど、一緒の時間を共有してくれる、という点は同じだった。何かを教えようというのではなく、一緒に何かを発見しようという姿勢で接してくれたのが嬉しかった。

# 高

校生のときのわたしは、友だちもいなくて、学校がつまらないと感じていました。思春期特有のことかもしれないですが、人とうまくやっていく方法がわからなくなり、中学生のころから「これは本当の自分なんだろうか?」といったことに悩んでいました。例えば、今話している言葉と今行動している自分は本当に一緒なのだろうか、といった悩みです。

当時は生きていること自体が苦痛でした。そんな夢も希望もなく、悩める日々を過ごしていたときに出会ったのが、現代美術でした。

きっかけは、学校の職員室に貼ってあった東京都現代美術館の展覧会ポスター。「MOTアニュアル1999 ひそやかなラディカルズム」展を告知するポスターは素敵なデザインで、とにかく私の目を釘付けにしました。見た瞬間にピンと来て、行ってみようと思ったのです。一人で美術館に行くというのも、ちよつとかつこいいなと思つたのがあります。

それは9人の作家さんによるグループ展だったのですが、作品を観ていると、「こういう視点でもいいんだ」、「そういう考え方をしているんだ」といった気づきがあり、とにかくどの作品もどの作家さんも自由そのものでした。

例えば、公園で掃除している人の足元だけを映した映像、雑巾を絞った状態のまま乾燥させたような作品、色がついた透明のコップが高く積み上げられた作品、ぼやけた視界をそのまま描いた絵画など、これまで学校の図工や美術の時間で習った

ものとはまったく違う世界が広がっていたのです。

こんなに自由でいいのかと思つたとき、自分はものすごく狭い世界で悩んでいただと気づきました。本当に新しい世界がパーツと開かれていく感覚で、くよくよと悩んでいた自分が馬鹿らしく思えてきました。

特に印象的だったのは、小沢剛さんの通称「ふとんの山<sup>\*</sup>」という作品。何枚ものふとんが山のように重ねられていて、一番上にはこたつの天板みたいなものが置かれています。上まで登ることができて、そこから壁にある写真を見られるという作品でした。

実際にふとんの山をよじ登って頂上であたりを見渡したとき、世界が違って見えたのです。今までは真つ暗な世界だったのが、いきなりクリアになったような感じですよ。抽象的ではあるのですが、モノに対する解像度が上がるというか、立体的に見えるようになったのです。それこそ、いつも使っているペンが別のものに見えるくらいに……。

言葉で伝えるのは難しいのですが、とにかく、ものすごく感動したわけです。それから美術館に何度も通うになりました。大げさではなく、わたしの人生が楽しくなったのは、現代美術のおかげです。

現代美術との出会いが、  
わたしを変えてくれた。

\*小沢剛《たそがれ地蔵建立》1998年12月18日―1999年1月14日（1999年）



いきなり開眼してしまった高校生のわたしは、学芸員になりたいという夢を持ちました。学芸員になって、現代美術の素晴らしさをみんなに伝えたい、こんなに自由な美術の世界をいろいろな人に伝えたい。そして、わたしのように狭い世界で悩んでいる高校生や中学生を一人でも多く救わないといけない。そんな使命感に駆られたのです。

学芸員になるために美大に行こうと思ったのですが、親に相談したら即座に反対されました。そもそもわたしは、小さいころから絵を描くのが苦手でした。美術の時間も嫌いでした。そんなわたしがいきなり美大に行きたいと言いだしたのでしたら、親が反対したのも当然かもしれません。

仕方なく一般大学の社会学コースに進学したのですが、「美術をやりたいのに、学芸員になりたいのに」という思いはより強いものになり、やりたいことがあるのに何もできない環境にうずうずしていました。

当時はまだウェブで検索したら情報が何でも出てくるような時代ではなかったのですが、墨田区にあるオルタナティブスペース「現代美術製作所」だけが唯一、ウェブでボランティアを募集していました。そこにずっと入り浸って展覧会の準備などを手伝っていました。大学にもほとんど行かず、さらに就職活動も挫折しました。そのため、大学4年生の3月になっても、就職先は決まっていませんでした。

その時期は国立にあるアーティストが運営するスペース「FADs Art Space」の

手伝いをしていたのですが、アーティストたちに「就職どうしましょう？」みたいな相談を気軽にしていました。みな「いいよ、別に就職なんてしなくてもいいよ」と言うばかり。ところが一人だけ真面目なアーティストがいて、「一つだけツテがある」と、その場で美術大学に連絡を入れてくれたのです。そのアーティストのおかげで、わたしは就職することができました。

3年後、契約期間が満了し、次の勤務先を探さないといいませんでした。このころは美術館での職員募集がほとんどなく、あつたとしても大学院を出ていないと採用してもらえないという厳しい現実を直面し、美術館で働くことを諦めてしまいました。結局、国家公務員の試験に合格して省庁で働き始めました。休日には、勤務地である茨城県水戸市にある水戸芸術館現代美術センターに通う日々を過ごしていました。何度も通っているうちに、美術館のスタッフや近所のアーティストと親しくなり、ときどきボランティアとして手伝っていました。

美術好きの公務員として過ごしていたのですが、数年が経ったあるとき、教育プログラムの非常勤ポストが募集されていることを知りました。かなり悩んだのですが、美術の仕事をしたいという思いが強く、国家公務員をやめて、水戸芸術館で働く決意を固めました。32歳のときでした。

# 物

心がついたときからあまり見えていなかった。二歳のときに病院で「弱視」という診断を受けたのだけど、それでも自転車を乗りまわせるくらい、幼少のころはかすかに視力が残っていた。最初は普通の公立小学校に入学し、三年生のときに盲学校に転校した。生まれ育った千葉県には、千葉県立千葉盲学校しかなく、毎日通うのも大変だったので寄宿舎に入るようになった。

盲学校では、自分でできることは自分でするのが基本で、掃除や洗濯も自分でやるようになった。さらに点字の勉強や白杖による歩行訓練など、一人で生活するために必要なことを教えてもらった。

中学生になったころには、ほとんど見えなくなっていたのだけど、いつかそうなるのだろうかと思っていたので、特にどうということはなかった。小さいころ、祖母から「目が見えないのだから、人よりも努力しないといけないよ」と何度も言われていて、「じゃあ、目が見える人は努力しなくていいの？」と疑問に感じていた。そういうこともあって、世の中に対しても、自分に対しても何も期待していなかった。

中学生のころ、先輩の影響もあって、鉄道が好きになった。夏休みには一緒にS

Lや静岡県の大井川鐵道を乗りに行ったりした。今もそうだけど、電車に乗っていると、まわりの人の会話が聞けて楽しい。乗客がどんどん入れ替わっていくし、話も（イントネーションや会話のテンポも）どんどん変わっていく。自分の知らない世界に触れられるのが嬉しかったのかもしれない。

高校生のときには、中島みゆきのコンサートに行くために、一人で両国国技館まで足を伸ばした。少しずつ行動が自由になるにつれ、小さいころから言われ続けてきた「障害者はこうあるべき」という概念に疑問を感じるようになっていった。

高校を卒業すると、盲学校の職業過程の理療科に進んで、あん摩マッサージ指圧師の国家資格を取得した。盲人が進むべきレールの上をただまっすぐに進んできたのだけど、ふと立ち止まって「本当にこれでいいのか？」と疑ってしまった。だから、一般大学に行くことにした。日本福祉大学を選んだのは、点字での入学受験を実施していたのと、多くの視覚障害者を受け入れている実績があったからだ。

美術鑑賞に興味を惹かれた理由はいろいろと考えられるのだけど、その根本は「盲人らしくないことがしたかった」というひと言に尽きるように思う。「目が見えないのだから」ということを言われ続けたことに反発することで、「自分の価値観を変えられるんじゃないか」という期待があったのだろう。写真を撮るようになってからも、写真家として活動しているのも、盲人らしくないことが楽しいからである。

盲人らしくないことが  
したかった。



**白** 鳥さんとはじめて会ったのは、水戸芸術館現代美術センターで働き始めた2014年のことでした。当時、上司にあたる森山純子さんは、新人スタッフと白鳥さんを一緒に鑑賞させるという、一種の新人研修みたいなことをしていたのです。

森山さんからある日、「明日、白鳥さんと鑑賞するようにセッティングしたから、11時にエントランスホールで待ち合わせしてね」と言われました。「森山さんも来られるんですか?」と聞くと、「私は行かないから。じゃあよろしくね」という返事だけで、何の説明もありませんでした。

白鳥さんが全盲であること以外は何も知らなかったし、全盲の人と一緒に観るということもよくわからないまま、当日を迎えました。白鳥さんとは特に自己紹介をすることもなく、「じゃ、観ていきましようか」という感じで展示室の中に入りました。そのときのわたしは障害者割引があることすら知らず、受付の人から「入場料はいらないですよ」と教えてもらったくらいです。

展示されていたのは、「見立て」のアーティストと言われている鈴木康広さんの作品。「見立て」とは、例えばげん玉の赤い玉をりんごにするなど、身近なものを似たものに置き換える技法です。見慣れたものを別のものに変えることで、独特の視点や発想が得られたり、豊かな想像力を生み出したりします。

見立ての作品なので、何が何に置き換わっているのかまで説明しないわけにはいき

ません。作品についてあれこれ説明するのですが、白鳥さんは反応が薄いんですよ。一本の色鉛筆があつて、線を引くと二色になって太陽が沈む地平線を一本の色鉛筆で表現できる、と説明しても、白鳥さんは「ふーん」と言うだけ。観終わっても、「じゃあ」という感じでお別れしました。

わたしはわき汗をかいてばかりで、「これは何だったのだろう?」「これで良かったのだろうか?」「わたしは何をしに行ったのだろう?」と悶々としたのでした。

仲良くなつてから白鳥さんに聞くと、「オレ、作品にピンと来なかつたんだよね。だから、そんなに反応しなかつたんだよね」とフォローしてくれたのですが、そのときは意味不明でした。

白鳥さんと仲良くなったのは、その後、一緒に水戸の街中の展覧会を観に行ったときでした。他の同僚と三人だったのですが、ものすごく盛り上がったのです。

すでに実施されていた白鳥さんのプログラムに私もチームの一員として参加していたので、少しずつ白鳥さんがどういう人なのか理解し始めていたのもあります。あとは、展覧会を観たあと、一緒に飲みに行ったのも良かったのかも。2015年夏の暑い日でしたから、ビールが格別でした。

白鳥さんに作品を説明しても、  
ほとんど無反応でした。

\*鈴木康広《境界線を引く鉛筆》(2002年)



マ イティ(佐藤麻衣子さんの愛称)と最初に水戸芸術館で展覧会と一緒に観たときのことは、正直言つてよく覚えていない。森山さんが誰かつけてくれると言うから、「じゃ、ちよつと観に行つてみるか」くらいの軽い気持ちだった。「おもしろかったら儲けもん」という感じ。だから、反応は薄かったと思う。

マイティと仲良くなったのは、一緒に飲んだのも大きかったけれど、三人で観たことも盛り上がった要因だと思う。二人だと話し役と聞き役に分かれることが多いけれど、三人だとそのあたりの役割があいまいで、話題がなくなっても誰かが立ち上げてくれる。その場その場で役割が変わっていくので、盛り上がりやすいように思う。

先日、栃木県的那須にある「N's YARD」という現代アートスペースで奈良美智さんの絵画作品を観たとき、みんなが髪の毛だと思つていたものを、誰かが「あまりにも長すぎるから、もしかしたら帽子なんじゃない？」と言いだした。おもしろそうだと思つて、「それ帽子なんだ？」つて聞いたら、「そう言われたら、これニット帽の網目のように見えるね」と言い出す人も現れて、「そうすると、女の子だと思つて観ていたけど、それも怪しくなってくるよね」と、どんどん話が展開していった。私を含めて五人いたのだけど、三人以上になると意見が言いやすくなるのはある。

正しい作品の解説を求めているわけではない。だから作品の情報は極力聞かないようにしている。音声ガイドを聞きながら観てまわつたこともあるけど、あまりおもしろいと感じなかった。

作者や作品の知識が知りたいというよりも、作品を観た人の印象や思い出を知りたいのだ。作品を観てどう感じるか、どういう言葉で説明するか、その人が歩んできた生き方を垣間聞けるようで楽しい。同じ絵を観ているのに、人によって印象がまるで違うのもおもしろい。

一人で美術鑑賞を始めたころ、「おもしろいなあ」と思つたことがあつた。松坂屋美術館で印象派の絵を観ていたとき、案内してくれた男性は「湖が描かれてます」と説明したのだけど、しばらくしたあと、「すみません、黄色の点々が描かれているので原っぱですね」と訂正したのだ。彼は「この作品を何度も観ているはずなのに、ずっと湖だと思ひ込んでいました」と言う。

びっくりした。湖と原っぱを見たことはないけれど、まったく違うものだと認識していたからだ。目が見える人であれば、ひと目で湖か原っぱかわかるものだと思うていたのだけど、実はそうでもないらしい。

実は、目が見える人でも、すべてのものが正確に見えているわけではないようなのである。それに気づくと、「目が見えない自分と何ら変わらないじゃないか!」と思えて、ものすごく気がラクになった。

作品を観た人の印象や  
思い出を知りたい。



人で観たり、たとえ二人で観たとしても静かに作品を見てまわると、ほとんどの作品を素通りしてしまいます。よっぽど印象に残る作品でない、同じ作品を何十分も観ることはないし、細かいところまで目を凝らして観ることもありません。

でも白鳥さんと観ると、作品の説明をしないとイケないのもあって、じつくりと観ることになります。たとえ以前に観たことがある作品でも、改めてじっくり観ると、新しい発見をしたり、疑問に思うことが出てきたり、まったく別の印象を受けたりします。

白鳥さんと一緒に鑑賞をするとき、何人も友人を連れていったのですが、スイッチが入ったかのように急に饒舌になる人もいました。よく知っている友人でも「この人、こういう説明の仕方をするんだ」という新しい面を知れて、その友人との距離が縮まったような感覚にもなりました。

奈良県の興福寺に9人ほどで仏像を観たときのこと。二体の鬼の木造立像を観ていたとき、誰かが「目が光っている」と言い出しました。パッと見ただけではわからなかったのですが、目の部分に水晶が埋め込まれていたのです。

それを観て、「目を輝かせて怖い」と言う人もいれば、「泣いているようにも見えませんか?」と言い出す人もいました。さらに額のところに、もう一つ目があるこ

とも気づいたので。参加者の女性は「今まで何度も観ているのに、はじめて気がつきました」と驚いていました。

白鳥さんと一緒に美術鑑賞をすること、みんなで会話をしながら観てまわるといことは、まさにこういう驚きと発見の連続なのです。

みんなで会話をしながら観ると、たまに作品の核心に近づくことがあります。木造千手観音菩薩立像を観ているときでした。「掃除道具みたいなものを手に持っている」「お腹が出ている」と好き勝手に話していましたが、誰かが「食堂のおばちゃんみたい」と言い出したのです。そのひと言があったから、恰幅が良くて優しそうなお顔をした仏像は、昔ながらの食堂のおばちゃんにしか見えなくなりました。「おばちゃんをつくるチャーハンは美味しそう!」とまで言い出す人もいたのです。

少し不謹慎かなとも思っていたのですが、案内をしてくれた興福寺の方は「この千手観音さまはこの寺のご本尊で、以前は千手観音さまの前で僧侶が集まって食事をしていたんですよ」とおっしゃるではありませんか。

一人だとたどり着くのが難しいのだけど、大勢で「あーでもない、こーでもない」と話していると、稀にはありますが、いつの間にか本質的なところに迫っていることもあります。

会話しながら観ると、  
驚きと発見の連続です。



## 誰

かと一緒に美術館に行くと、その人と近くなる感覚はある。個人的な話が出るだけでなく、時間と場を共有することが大きいのではないだろうか。作品を鑑賞するという得体の知れない共通のテーマがあると、自然と仲良くなってしまうのかもしれない。

作品のことを話しているときはまだイントロのようなもので、その人が好きなようにしゃべり始めると、徐々に気分も上がってきて、作品に対してグッと集中してくる。そうになると、その人とつながるきっかけも増えてくる。

絵画にしても現代アートの作品にしても、それこそ仏像にしても、静止していてもあまり多くを語っていないのがいいのかもしれない。映画のように、音や映像、セリフにストーリーなど、情報量が多すぎると、それらに引つ張られてしまって、自分の話を語り出すところまでいかないように思う。

美術鑑賞の場合は、饒舌ではない作品がそこにあり、鑑賞者が自由にあれこれと考える隙間がある。だからこそ、自分を引き出してくれるような気がする。与えられたものを観て感動するのではなく、自分の内側から出てきたものを楽しむという体験は、現代のような忙しい世の中ではあまりできないのではないだろうか。そういう体験を共有することで、一緒に観てまわった人との距離が縮まってくるのではないだろうか。

饒舌ではないからこそ、自由に考える隙間がある。



鑑賞会を始めたころは、今よりもよくしゃべっていたように思う。プログラムを主催する側として、「しゃべったほうがいいんだろうな」という意識が強かった。でも、ここ数年は、あまりしゃべらないようにしている。というのも、最初に述べたように「美術好き」ではなく「美術館好き」だから、作品が一番にくることはほとんどない。稀にあの人の作品を観たいと思うことはあるけれど、相手が観たいものについていくことのほうが圧倒的に多い。

そういう理由もあって、一緒にいる人の話を聞くことに身を任せたほうが絶対にいいと考えるようになった。オレがしゃべらないほうがその人のそのときの気分に乗れやすくなるし、その人が話しやすい流れをつくってあげて、どんどん話してもらったほうがおもしろい展開になる。だから今は、鑑賞会でも以前ほどしゃべらずにみんなの話にあいづちを打ったり、うなずいたりしていることが多い。

少し前に渋谷のギャラリーで鑑賞会をしたとき、三人の参加者はみな初対面だったのだけど、終わったあとに三人で連絡先を交換しているのを見て「やったー！」と心の中でガッツポーズをした。

例えば、よく行く飲み屋で隣に座っている人と仲良くなつて、相手の名前もよくわからないのに話が盛り上がって、なんとも言えない充実感が残る。「そういう出会いだとかコミュニケーションンっていいな」と以前から思っていたので、自分の近くでそういうことが起きて、かなり嬉しかった。

## 水

戸芸美術館で教育普及の学芸員をしていて、またいろいろなプログラムをする中で、行き詰まりを感じるようになってきました。

美術館教育にも費用対効果が求められるようになり、誰のための美術なのかと悩んだり、美術が持っている力を疑ったりするようになってしまいました。美術館教育とは本来、時間がかかるもので、来館した100人の子どものうち、10年後に一人が美術館に戻って来てくれたらいいなという世界です。そのために種をまき続けるのが、美術館教育の仕事の一つです。求められる成果と自分の考える美術館教育のあり方が乖離し、無力さを感じるようになりました。

そのような状況を打破するためにも、日本から飛び出してみようと思い立ちました。文化庁新進芸術家海外研修員として、2021年11月にオランダのアムステルダムに渡り、美術と精神疾患の相互作用というテーマを掲げて、1年間の研修を開始しました。

お世話になったのは、精神科病院でアーティスト・イン・レジデンスを運営しているフィフス・シーズンでした。ディレクターのエスター・フォセン氏が日本でレクチャーをした際、アーティストと患者が関わることで起こる化学反応について、次のように話していたのを聞いたのがきっかけでした。

「病院では、患者は『患者』としての立場で過ごすようになり、本当の『自分』をい

つの間にか忘れてしまいます。ですが、アーティストと関わることで、患者は『個人』に立ち返り、自分らしくいられるようになるのです」

美術に触れることで、自分らしくいられる――。

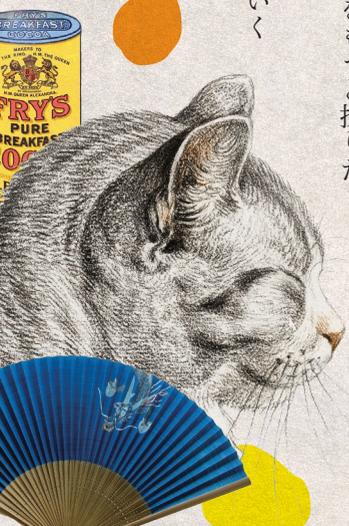
ハツと初心に返ったような思いでした。それは、これまでに自分自身が経験したことでもあったし、白鳥さんで行ってきたプログラムで実感していたことでもあったのです。

学校や職場、家庭、地域、社会での役割とは関係なく、美術館では自由にしゃべられて、気兼ねなく自分の意見が言える。そこにあるのは、みな対等という関係性であり、自分が自分でいられる場所。まさにわたしが美術にハマった理由でした。あのころはうまく言語化できませんでしたが、美術館は自分らしくいられる場所であると強く認識したのです。

そして、この前向きな作用を美術館としてどう伝えていけばいいか、教育普及の存在価値をどのように理解してもらえればいいのか、より多くの人に体感してもらうにはどうすればいいか……。美術の有用性を社会に伝える方法をもっと探りたいと思いました。

美術や美術館が社会に貢献できる役割がある。それを伝えていくのが私の役割なのかもしれないと思うようになったのです。

美術館では  
自分らしくいられる。



**は** じめて東京都現代美術館に行ったときは最高だった。ピアノが布にくるまれている作品があったのだけど、アテンドしてくれた学芸員の方が「これは意味があるんですけど、その意味がわかってもらわなくてもいいんですよ」と言ったのだ。

はじめての現代美術ではなかったのだけど、「ふーん、現代美術ってそういうことでもいいんだ」という新しい発見だった。

どうしても作品のことを理解しようとしてしまうけれど、「わからなくてもいい」と言われると励まされる。そもそも「何をどこまで楽しめるのか」が自分のテーマだったので、「それでいいんだ」と背中を押してもらったような思いだった。

わからないことに注目するようになったのは、もつと最近になってから。マイティと一緒に鑑賞会をするようになったこともあり、「参加者に何かをわかってほしくて鑑賞会をするのか」といったことを考えるようになった。

鑑賞会というプログラムにすると、どうしても目的だとか狙いとかを考えてしまう。参加者に何かを得て帰ってもらいたいと思ってしまう。わかってほしいテーマがないわけではないけれど、それを強調したいわけでもない。なので、理解しても理解しなくてもいいし、「わからない」というのも有りだなと考えるようになった。

何人かで写真を観に行ったときのことだ。寄りすぎているのかピントが合っていないのか、ぼんやりとした作品だった。あまりにもわけがわからないので、言葉で説明するのが難しい。一生懸命に伝えようとする人もいたけれど、徐々に言葉が出てこなくなってくる。誰もしゃべれない空気感の中、でも何人かは「わからない」状態を楽しんでいるようでもあった。

わからないからおもしろいのも、わからないから楽しいのも、また真なのである。特に現代美術が好きなのも、よくわからないから。わかりにくいものがたまらないし、「何一つわかりません」という作品こそが最高である。

鑑賞会に成功と失敗があるのか、昔はよく考えていた。話が広がらなかったり、参加者の話をうまく引き出せなかったりしたことはよくあるのだけど、失敗といった感覚はない。性格的なものもあるけれど、考えても理由がわからないからである。作品のせいかもしれないし、自分の気分や参加者の体調のせいかもしれないし、一緒に観た人との相性が悪かったせいかもしれない。その辺を考えても結局わからないので、放っておくようにしている。

それに鑑賞は、その場で終わりではない。家に帰ってからもうだし、1年後、それこそ10年後に「あのときの作品って、あーだったのかなあ」と思うこともある。だからこそ、今わかる必要もないのではないだろうか。ここ最近では、「わからない」ことをエンジョイしているようなものである。

「わからない」からこそ楽しい。

**オ**ランダの美術館を調査する中で特におもしろかったのが、視覚障害者の体験ができるミュージアム。視覚障害者の案内により、完全に光を遮断した暗闇の中で、視覚以外の感覚やコミュニケーションを体験できます。最初は、ダイアログ・イン・ザ・ダークと同じようなものだ、あまり期待していませんでした。

ところが、そんなわたしの予想はいい意味で裏切られました。案内してくれた視覚障害者のスタッフが「今からパリに旅行に行きまーす！」と入口で声をかけます。「セーヌ川で舟に乗りましょう」と言つて箱のようなものに乗り返ると、ガタガタと揺れます。実際はスタッフの方が一生懸命揺らしているようでしたが……。

また、「愛の南京錠の橋」で有名なボンデザールにも行き、橋にかけられているたくさんさんの錠を触りました。シャンゼリゼ通りで買い物をしたり、カフェでお茶を飲んだりして、確かにダイアログ・イン・ザ・ダークの経験と似ているのですが、日本で経験したものはまるで違っていました。

お国柄もあるとは思いますが、スタッフの方といろいろ話せるのです。しかも、パートナーとの出会いや家事の分担など、かなりプライベートな話題で盛り上がりました。

視覚障害者の体験を通じて何か生真面目なことを押し付けようという様子はまったくなく、お互いに対等な立場で、まるで友だちのようにおしゃべりをして楽しん

だ。そういう新鮮な感覚でした。

オランダの美術館でいつも驚かされるのは、来館者がよく話していること。ときどき来館者と監視員が談笑しているのを見かけます。

オランダだけでなく、他のヨーロッパの国々にも言えることかもしれませんが、美術館は日本のように静まり返ったところではなく、にぎやかでガヤガヤしたところなのです。絵を模写している人もいれば、座り込んでくつろいでいる人もいます。来館者が他の来館者に知り合いでもないのに話しかけていたりします。

作品を観て話をすることが、当たり前前の文化なのでしょう。オランダの美術館での様子を見ると、「好きなスタイルで観ていいよ」と推奨してもらっているように感じます。「しゃべりながら観てもいいよ」という雰囲気のある美術館が日本にも今よりもっと増えたらいいなと思います。

美術館によつて考え方は異なるので、まずは会話をしながら観てまわり、注意をされたら別の美術館で試してみる。そのくらい、来館者もめげずに挑戦してほしいと思います。

そしてわたしは、「しゃべりながら観る」ことの楽しさとおもしろさ、さらに奥深さを実感するような人が一人でも増えるような活動をしていきたいと考えています。

しゃべりながら観るのが  
当たり前!?



Tokyobench

佐藤 白鳥さんにとって、アートとか芸術って、どっいうものなの？  
白鳥 美術館に行ったことがないころは、憧れに近い感じだったかな。ファッションみたいだね。ファッションもアートも、オレは何もわかっていなかったんだ

### 身近で対等な美術館

けど、「みんながいいと言うからきつといいんだろな」という感じだった。今はもつと身近なものになった。アートそのものよりも、美術館やその周辺のことに思いをめぐらせているのかなとも思うのだけど、そのあたりの区別は、正直ついていない。

佐藤 わたしは美術館って、対等にいられる場だとは思っているのね。上下関係もなければ、性別の違いもなく、思ったことを主観で話してもいい場。世の中には意外とそういう場ってないんだよね。でも、美術館では自由に



なよんぞ  
ししゃぶるん  
だろろう？

白鳥建二  
×  
佐藤麻衣子

話せて、いつの間にか隣で聞いている人もときどきいて、そこがなんと言うか、とても心地いいんだよね。たとえ話が盛り上がりなかつたとしても、すごく心地いい。

**白鳥** マイテイらしいね。

**佐藤** アートと言うと、どうしてもヒエラルキーがあつて、知識がある人やわかつている人が偉いと思つてしまつたりするんだけど、わたしにとつての作品鑑賞はみんな対等な場をつくれる、ということかな。

### 作品のほうから 歩み寄つてきた

**白鳥** フェリックス・ゴンザレス  
＝トレスという現代美術の作家  
がいるんだけど、銀色の紙に包

まれたキャンディが床に長方形になるようにいっぱい置かれて  
いるという作品\*があつたんだよ  
ね。かなり大きな長方形なんだ  
けど、「キャンディを一つ食べて  
もいいよ」と案内されているわ  
け。そのとき、「現代美術って、こ  
れかー!」と思つた。でも当時は、  
その「これかー!」というものが  
何か、まったくわかつていなかっ  
た。何年か後に同じ作品を観て、  
例のキャンディを手にとつたと  
き、あのときの「これかー!」に  
気づいたんだよね。

**佐藤** どういうことだつたの？

**白鳥** それまで作品鑑賞をする  
というのは、自分から作品に近づ  
いていくという感覚があつたん  
だけど、作品のほうから手を伸  
ばしてくれたように感じたの。

向こうから歩み寄つてきてくれ  
たような感じで、「そういう作品  
もあるんだな」という自分なり  
の解釈ができた。

**佐藤** 最初に観たときは、よくわ  
からないけれど、何か引つかか  
りがあつたということ？

**白鳥** 何年後にもなつてから腑に  
落ちるということもある。だか  
ら、友だちがその作品の意味を  
説明しようとしたら、「言わない  
で!」と止めたりするんだよね。

**佐藤** 逆にわからないようにして、  
わからないのを楽しんでいるわ  
けだ。

**白鳥** 知りたいという楽しみもあ  
るんだけど、知らないで取つて  
おくといい楽しみもある。オレ  
は、そこにこだわっているよう  
な気がする。

**佐藤** でもさ、情報を聞かされて  
もエンジョイしていることもあ  
るよね？

**白鳥** ある。うん、どつちもある。

**佐藤** たまにポロツと情報を聞いて、  
「おぉー」つて盛り上がった  
りもするもんね。

**白鳥** それでも、やつぱりオレは  
後からかな。最初に情報を聞いて  
しまうと、わかつたような気  
になつちゃうから。すぐに納得  
してしまうしね。

### 距離感ってなんだろっ？

**佐藤** わたしたちは目が見えるか  
ら、視覚的に遠くにいる人と近く  
にいる人がわかる。もしくは、話  
して相手の顔を見れば、「こ  
の人、つまんなさそうにしている

な」とか「この話にはあまり興味  
がなさそうだな」というのがわか  
るけど、白鳥さんは会話をしない  
限りは人と距離感をつかめない  
わけじゃない？ しゃべつてい  
て「この人、ちよつと遠いな」と  
か感じるものなの？

**白鳥** 分析的に考えたことはない  
んだけど、言葉の出し方や抑揚と  
かに表れるんじゃないかな。子ど  
ものころは、今とは比べものにな  
らないほど、ほとんどしゃべらな  
かつた。自分がしゃべり始めた次  
の展開に自信がなかつたんだ。自  
分が話しかけたとき、相手はそう  
いう気分じゃなかつたらどうし  
よう……つて。怖がつていたんだ  
と思う。最近では、少しずつ自信が

ついてきて、ようやく普通にしゃ  
べれるようになった。あとは、誰

かのスイッチが入つたことで、オ  
レもテンションが上がることで  
多い。やつぱり人につられるんだ  
ろうね。その辺は、生きものだし、  
生モノだから。

**佐藤** 相手との距離感つて、言葉  
からだけではない、ということ  
だよな？

**白鳥** その人がどつちを向いて  
しゃべっているかとか、声の大き  
さやトーンとか、それこそ空気と  
か雰囲気とか、そういうことか  
らその人のことをイメージする。

**佐藤** 会話は情報の一部でしかな  
い、ということだね。

### 言葉の選び方に個性が出る

**佐藤** 作品の色を聞くと思うんだ  
けど、色つてどういうふうにい

メージしているの？

**白鳥** 色については、よく質問されるんだけど、例えば「赤」と言われたら、「赤」という概念は残る。具体的なイメージはできなくても、赤というのはどういう色なのかは知っている。見たこととはないけど、知識として知っているという感じかな。

**佐藤** 「赤」と言っても、いろんな赤があるしね。

**白鳥** 色の表現で多いのは、季節関連かな。夏の空、夏の海、冬の夕焼け、秋の紅葉とか。そういうえば、食べものでたとえる、おもしろい人がいた。「おいしそうなオムレツみたいな色です」って。結局、オレにはよくわからないし、その人にとってのおいしそうなオムレツの色なんだろうけどな。

**佐藤** 白鳥さんの鑑賞会では、みな主観的に話してもいい、というのはあるよね。あんまり客観性は求めていないし、主観で話すおもしろさってあるよね。

**白鳥** 主観というのは、その場に出たものだからね。整えられた文章の言葉ではなくて、その場の雰囲気思わず出てしまった言葉という良さがある。

**佐藤** 「なんでその言葉を選ぶだろう？」って考えるだけでも楽しいよね。学校や会社では、突飛なことを言ったり、空気を読めないような発言をすると、まわりから白い目で見られたりするじゃない。でも鑑賞会では、思ったことは遠慮せずに何を言ってもいいし、わからないことは「わからない」と言ってもいい。

い。思ったことを言うだけでも、場は温まっていく感じがする。

**白鳥** 聞いている人がいる、というのがポイントなんだよね。オレが理解していなくても問題ない。

**佐藤** カウンセラーみたいに、みんな白鳥さんに恋愛相談とかするもんね。でも白鳥さん、何もしゃべっていない。聞いているだけなのに、「ああ、そうですよね！」なんて言って、満足して帰って行くんだよね。

**白鳥** 相談したい人って、だいたい自分の中に答えがあるから、しゃべっていたら勝手に答えにたどり着くんだよ。だから、オレがわざわざ口を挟む必要はない。



## 相手に気持ちよくしゃべってもらおうコツ

**佐藤** それは鑑賞会でも同じじゃない？

**白鳥** 相手がいかに気持ちよく話してくれるか、ということとはよく考えている。20代前半のころは、誰かと仲良くなるために、相手の趣味や好きなことを聞いて、それについて2、3個質問するんだよね。オレもそれについて知っているかのように振る舞うと、相手は気持ちよく話し始める。例えば、バイクが好きな人が何かを話題にしたら、「あ、それ聞いたことあるかも」ってあいつちをする。

**佐藤** 全然知らないの？

**白鳥** そう、さっぱりわかんない

よく使ってしまう派。アレとかコレとかしか言っていないんだけど、白鳥さんは受け止めてくれる。

**白鳥** 作品に近づこうとしているのがいいんだよね。

**佐藤** そういえば、作品に関係ない話になっても、あんまり軌道修正しないよね？

**白鳥** だいたい戻ってくるから。でも中には、自分の話だけをしたい人もいる。そういう人に限ったことではないんだけど、どこで話を切るのかは、ものすごく迷う。話が弾んでいても、そのまま話が弾んでいるだけで終わってしまった方がいいのか、今盛り上がりつつあるから逆に切ったほうがいいのか、といったことは毎回考える。

んだけど、気分よくしゃべってもらうと、時間はもつし、相手のこともわかってくるし、なんとなく仲良くなったような気がしてくる。そういうのを試していた時期がある。

**佐藤** 今はどうしても英語を話さないといけない場面があって、語学で苦しんでいるんだけど、白鳥流を思い出すと、かなり英語が上達するんだよね。自分から一生懸命に話しかけなくてもいいと割り切って、相手に気持ちよく話してもらおう。ちよこちゃんこあいつちを打ったり、質問を挟んだりすると、相手は気持ちよく話してくれるんだよね。そうすると、徐々にリスニング能力がついてくるし、経験値が増えるからあいつちや質問のバリ

**佐藤** 飲み会でいつ切り上げるかという話と同じだね。

**白鳥** 一番いいときに切り上げる人っているよね。でも、そのまま待っていたら、いい話が出てきた、ということもあるんだよ。だから、時間だけで切るわけにはいかないし、その場の雰囲気を読み取ってなのか、読み取っていないのかはわからないけど、ほとんど賭けみたいなもんだよ。

## 美術館が好き！

**佐藤** 白鳥さんは、美術が好きなんじゃないかって、美術館が好きって言ってくれた。わたしがずっと思っていたことを言語化してくれたおかげで、私も堂々と美術館で起こる出来事が好きって

エーションも増えてくる。

**白鳥** 「そうそう、そうだよね」と反応すれば、だいたいは進んでいく。知らなかったことも、少しずつ理解できるようになるしね。

**佐藤** 自分が言いたいことを相手に伝えられたときよりも、相手が伝えたいことを理解して、うまく返せたときのほうが嬉しい。白鳥さんと出会っていなかったら、こういうマインドになつていなかったかも。

**白鳥** オレ、ほとんどしゃべらないしね。鑑賞会で形とか色とか正しく言おうと思ったら、かなり大変だと思う。限界があるから、話すほうもどこまで話したらいいかわからなくなってくるんだよね。

**佐藤** わたしは「こそあど言葉」を

言えるようになった。

**白鳥** もともと美術が好きで鑑賞を始めたわけじゃないしね。マティイは、美術をどういうふうに観てほしい、とかあるの？

**佐藤** 自由に好きなように観てもらっていいんだけど、逆に「観てもわからない」とか「自分にはわかる作品がないから行かない」とか思われるのは残念かな。誰かが発したひと言だけで、会話が広がっていくから。だから、美術館に来たら楽しいし、わからなくても楽しいよ、と声を大にしてい言いたい！

**白鳥** 逆にわからないほうが楽しいよね。

**佐藤** 鑑賞会でこの人苦手だなあと思って思う人もいるの？

**白鳥** いるんだろうけど、気にしな



いようにしている、というのが

正しいかな。鑑賞会をするときは、事前に気分を整える準備をするんだけど、そのとき「どういう人がどういうことを言っても、とりあえず聞いて受け止めよう」と自分に言い聞かせる。「たとえ

作家のことを溶々と語るような人が出てきても、それはそれで有りだよ。そういう人が来ても、拒否はしないでおう」と。自分の中で、「これはないだろ」というのを消して、できるだけフラットにするようにしている。だから、どういう人が来ても大丈夫。

**佐藤** そう言えば、前にいきなり作品の解説を話し始めちゃった女性がいたよね。

**白鳥** いたねー。最初にそういう

ことは言わないようにって説明したんだけどね。彼女が話し終わったら、その場がシーンとなっちゃった。だって、話が広がらないからね。

**佐藤** その女性、あとで言っていたんだけど、その作品が嫌いだったんだって。「私はこの作品が苦手だから、何も感想も浮かんでこない。だから先に作品の解説をしちゃったんです。そうすれば、あとで口を出す必要がないから」って言った。

**白鳥** わからないなら「わからない」って言ってほしかった。

**佐藤** あと、美術館では静かにしないといけないと思っっている人が多いけど、もっとしゃべりながら観てほしいよね。

**白鳥** 美術館によるよね。都内で

も平気なところは平気だし、ダメなところは昔からダメ。

**佐藤** この前、海外の友だちが「日本の美術館は〃してはいけないこと〃が入口に書いてあるから、それで子どもや親が萎縮してしまいうんじゃない」って言っていた。あれは敷居を高くしているし、しゃべったらダメという気持ちにさせられる気がする。

**白鳥** 美術館の成り立ちがそもそも違うから、海外と並列では語れないところはあるけど。

**佐藤** 誰でも作品を観る自由はあるし、誰でも作品を自由に語る権利がある、そう訴えたい。

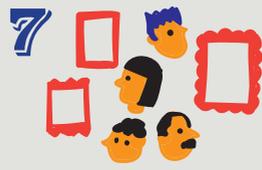
**白鳥** 日本の美術館もそうやっていけばいいよね。

**佐藤** そういう活動をしていかなきゃ、だね。



### 8 わからなくてもいい

意味不明すぎて、何も言葉にできなかったり、頭が「？」でいっぱいになっても大丈夫。わからないことを正直に話して、逆にわからないことを楽しもう。



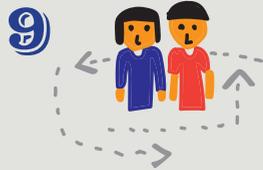
### 7 好きな作品を観る

最初は具体的な作品のほうが話が弾むけど、それが正解でもない。言ってしまうえば、何を選んでもいいので、自分たちの好きな作品を選ぼう。



### 6 最初は長い時間をかけて

場が温まるまでは、じっくりと鑑賞しよう。最初の作品は、余裕を持って20分くらい予定しておくといいよ。



### 9 導線だけは気をつけて

数十分ほど立ち止まって鑑賞するので、他の来館者の妨げにならないように気をつける。譲り合って気持ちのいい鑑賞を心がけよう。

何かあってもめげないし、嫌なことがあってもすぐ忘れるんだよね



まわりにスペースがある作品を選ぼう！



### 10 注意されたら？

他の来館者に注意されたのなら、謝って彼らがいなくなるのを待てばいい。もし美術館のスタッフに注意されたら、他の美術館でトライしよう。



### 12 後からジワジワくる

鑑賞時はピンとこなくても、家に帰ってからハッと気づくことがある。それが数年後だったりすることもあるので、無理に理解しようとせずに、楽しみは取っておこう。



### 11 良いも悪いも均等割で

うまく鑑賞ができなくても大丈夫。原因は作品だったのか、美術館という場だったのか、相手の体調にあったのか、わからないから、みんなで平等に持ち帰ろう。



# 白鳥流 会話型 美術鑑賞のすすめ



鑑賞の仕方は無限にあるしルールもない。自分が観たいように観たらいい。白鳥流の鑑賞法を紹介しておくので、自分の鑑賞スタイルの参考にしてほしい。



### 1 アポは取らなくてもいい

家族や友だちで行くときは美術館に連絡しなくてもいい。アポをお願いするときだけ、事前にアポを入れておくとスムーズかも。



### 2 あらゆる想定をしておく

どんなことがあってもめげないように、考えられる不測の事態を想定しておく。事前にメンタルを整えておこう。



### 3 情報は最低限で

情報誌や情報サイトで展覧会などの情報をゲットしよう。ただし、作家や作品の情報は調べないほうがオレは鑑賞を楽しめる。

前日は、飲み過ぎないように！



### 4 コンディションを整える

会話型の鑑賞は、体調に大きく左右される。寝不足だったり、体調が悪かったりすると、楽しくもおもしろくもない。万全の体調で望むべし！



### 5 目標を設定する

どういう鑑賞にしようか、事前に決めておくといい。友だち同士の場合は、一緒に美術館に向かうときにでも話しておこう。



# 白鳥流 会話型 美術鑑賞を やってみよう!

紙上で鑑賞会！  
白鳥さんや  
佐藤さんの  
会話を参考に、  
何でもOKなので  
自由に絵や仏像を  
説明してみよう。



さて、どんな作品なの？



女の人が中心に描かれているよ。



どんな女の人？



うーん……、若いのか年配なのか  
わからないな。年齢不詳。



ははは。



あざやかな青いエプロンのようなものを  
腰に巻いていて、頭になんかかぶってる！



どんなやつ？



今はあまり見かけないデザインかな……。  
白い布みたいなの。おでこが出て、  
髪の毛が見えないんだよねえ。



ふーん。



あっ！ ポットから甕かめのようなものに、  
白い液体を注いでいるんだけど、  
食べ物を扱っているから髪の毛を  
まとめるような役割なのかも。



ああ、なるほどね。



甕の周りには一口大のパンが置かれていてね、  
テーブルからこぼれ落ちそうなくらいパンがあるよ。  
バスケットもテーブルの上であって、  
中にはホールホールのパンが入ってる。



え、そんなに!? そのパンを入れるのかなあ？



そうかもねえ。ちなみに、女性の表情は良く  
わからないね。液体を注ぐことに集中している感じ。



じゃあ、こっちを見ていないんだ。



そうそう。視線は下に向いているし、口は半開き。



えー、そうなの!?



絵の左側には、窓があるけど、  
部屋はちょっと薄暗いかな。  
オランダの冬は基本的にくもりだから、  
これは冬に描かれたのかも。



ああ、マイティがしんどいって言っていた冬ね。



少しくらい出てよってくらい太陽の光が  
ないんだよ。良くてくもり。悪くて雨。



ふふふ。水戸の冬はいいよー。



いいなあ、冬は日本に行きたいよ。

## 大願地蔵菩薩

(14世紀、メトロポリタン美術館所蔵)



次はどんな作品？



お地藏さんっぽいね。わたし、仏像系は、まったくわかんないんだけど……。



お地藏さんだとしたら、立ってるのかな？



そうそう、たぶん蓮の花なんだけど、その上に立ってるよ。花の上部が平らになっていて、裸足で立ってる。



そうなんだー。



右手に棒を持っていて、お地藏さんの身長より長い。頭一個分くらい長いかな。先端は輪っかになっていて、そこにリングがじゃらじゃらついている。



じゃらじゃら？ じゃあ、たくさん？



うん、4つはついてるかな。それでね、左手の手の平には何か乗ってる。



なんだろう？



桃っぽい形のものを乗せているよ。



へえ。なんか意味ありそうだよええ。



たぶんねー。きっとこの会話を聞いている、仏像系に詳しい人は、ツッコミたくて仕方ないと思うけど。



ははは、そうだよええ。



お地藏さんの背後には、放射線状に針のようなものが広がっていて、後光が差している感じだよ。



おー、いいねえ！



髪型はね、鎌倉や奈良の大仏みたいなパンチパーマじゃなくて、ツルっとしてる。



はは。顔はどんな感じ？



目をつぶっているからよくわからないけど、穏やかな表情だよ。あれ？ 良く考えたら、お地藏さんって、全員目をつぶってたっけ？



オレが知るわけじゃないじゃん！



あーごめんごめん。お地藏さん、今までたくさん見ていて、手を合わせていたのに、全然見ていなかったんだなあ。

二人の鑑賞会は、このまま居酒屋に持ち込まれ、永遠と続いていくのでした……。みなさんも、白鳥流・会話型鑑賞会を楽しんでください。

## 美術館は温かい場でありたい

逢坂恵理子

私が白鳥さんと実際にお会いしたのは、1998年だったと思います。水戸芸術館にいたときに担当したジェフ・ウォールの展覧会に白鳥さんがいらしたときですね。とても大きな作品と一緒に観た記憶があります。

その前にはじめて水戸芸術館に来館され、「しなやかな共生」展を楽しまれたと聞いていました。目の見えない方が、言葉だけで作品を鑑賞する。しかも、それを楽しんでいらつしやる。それが私には衝撃でした。ものすごい想像力の持ち主なんだなあと。

最初に案内するときに「どんな風に接すればいいですか？」と聞いたのですが、白鳥さんは「友だちみたいにしてください」とおつしやつたんですね。それがとても印象的でした。その言葉を聞いたので、特別扱いするというのではなく、笑ったり軽い冗談を交わしながら、こちらも構えることなく一緒に鑑賞することができたように思います。

水戸芸術館には足繁く通っていたのですが、スタッフもボランティアの方も含めて、みんな白鳥さん術に関わる人のための研修が高知県立美術館で開催されることになり、白鳥さんに講師をお願いしたことがありました。そのときのレポートには、白鳥さんの言葉が次のように報告されています。

「美術館に行つて楽しいと感じるのは、例えば絵に描かれた木の葉が『さらさら』『ざわざわ』揺れている、というように、情感豊かに描写されることです。案内してくれた人が、逆に『こんなにじっくり観たことがなかった』と感動していることもあります。僕にとって美術館が楽しいのは、絵を前にした人とのコミュニケーションで、その『ライブ感』がたまらないんです」(地域創造レター4月号No.99「ステージラボ高知セッションレポート」より)

誰かと一緒にあれこれ言い合いながら、肩の力を抜いてその作品の世界に足を踏み入れていくというのは、簡単ではなくても、やわらかくあるべきですね。時間と空間を共有することの大切さをまず教えてくださいました。

でも、作品を言葉だけで観ることがどのようなものか、どの程度伝えられるのか、という思いは尽きません。作品をいかに理解したかとは異なり、大切なことは作品を媒介とした会話を通して相手と

んに説明したがつていました。ちょうど日本の美術館にも対話型鑑賞の手法が入ってきたところで、水戸芸術館ではこの研修会を実施していたので、作品鑑賞というのは、決して正解があるわけではなくて、一つの答えに収束するわけでもなく、多様な見方を提供してくれるもの、さらに対話を重ねていく先に作品の本質に迫れるということを、みんな実感していたところだったのです。

対話型鑑賞では、まずは作品を観察して、その作品がどういふもので何が描かれているのかを、言葉に置き換えていくことが出発点になるのですが、この方法は白鳥さんと作品を観るときも有効だなと思いました。そしてそこから会話を弾ませていく中で、私たち学芸員のほうが、作品をやさしい言葉で表すことが苦手だったり、自分が「このくらいだろう」と認識していた作品のサイズと実際のサイズが異なることに気づいたり、白鳥さんと一緒に観ることで、自分がいかに作品をしつかりと観ていなかったのか、ということにも気づかされました。

2000年2月に一般財団法人地域創造主催の芸

コミュニケーションすることや、作品を媒介したときに起きる新鮮な感覚、そして開放感や楽しさを共有することです。

白鳥さんと話すことによつて、自分の中にある無意識の偏見や思い込みにも気づかせてもらつたと思います。

対話型鑑賞の手法は美術館に広がってきていますし、展覧会を見ながら小声でお話しされる方もいらつしやいますので、会話しながらの鑑賞を拒否されるというのではないと思われれます。でも大声で話していると注意されてしまつたりすることはありますし、いろいろな視点の人や考え方の人がいらつしやいますので、そういう方々を拒否せず、みんながうまく共生できるように、美術館も受け入れの方法を模索していきたいですね。個人的には「美術館は温かく、やわらかな雰囲気のあるべき」だと思っています。

**逢坂恵理子** おおさか・えりこ 東京都生まれ。学習院大学文学部哲学科卒業。ICA名古屋を経て、1994年より水戸芸術館現代美術センター主任学芸員、同センター芸術監督。2007年より森美術館アーティスティック・ディレクター。2009年より2020年3月まで横浜美術館館長。2019年10月より国立新美術館館長、2021年7月より国立美術館理事に就任。

## 参考文献:

『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』  
(川内有緒・著、集英社インターナショナル)

## しゃべりながら観る

発行日 2023年3月27日

著者 白鳥 建二 佐藤 麻衣子  
監修 森 司  
編集 森 秀治  
装丁・レイアウト 矢萩 多聞  
写真 池田 宏  
企画 小山 冴子 川満 ニキアン

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28  
九段ファーストプレイス5階  
Tel:03-6256-8435 Fax:03-6256-8829  
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

印刷・製本 株式会社 丸上プランニング

ISBN 978-4-909894-44-1 C0070

© 2023 Arts Council Tokyo printed in Japan

営利、非営利を問わず、当資料のコンテンツを許可なく複製、転用、販売など二次利用することを禁じます。

### Tokyo Art Research Lab (TARL) とは

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の人材育成事業として、アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共につくりあげる学びのプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

本書はTokyo Art Research Lab 研究・開発プログラムの一環として制作しました。

## あとがきに代えて

「しゃべりながら観る」が通称「ながらみ」となって流行ることを願っている。そのためには本書が美術館を縁遠く思っている人たちに届き、「ながらみ」いいじゃん、と思ってもらいたい。次に「ながらみ」している来館者が美術館から「話さないでください」と注意されなくなる必要がある。しかし、美術館での鑑賞時のあるべき姿は「走らない・しゃべらない・触らない」の3ないルールに象徴されている。

「ながらみ」は、足早に目視して過ぎ去るのではなく、立ち止まり、「かもしれない」を繰り返す仕草だ。「走らない」「触らない」はクリア。「しゃべらない」が「ながらみ」と抵触する。「しゃべりながら観る」からだ。しかし、作品の前に佇み、はじめの見え方に意識的に揺らぎを与え、より解像度高く掴み切ろうとする姿勢は、鑑賞行為そのものと言えるだろう。それは「見た」から「見えた」、体験から経験、認識から理解への移行だ。会話の中でその移行が訪れる瞬間が楽しくて幸せを感じると語る白鳥さんは、まぎれもない美術鑑賞者のお一人だろう。

「バズる」ことを目論んで写メを許可する美術館が増えている。撮影禁止も最

近までは美術館のあるべき姿だったことを思えば、「ながらみ」も実践者が増え、創客に繋がるのであれば容認される流れになるかもしれないと期待したい。それ以上に「ながらみ」を美術館側から推奨していくイメージを積極的に抱きたい。

美術館は敷居が高いとされる精神的なハードルを下げるのがアクセシビリティの向上の一つに繋がるとしたら、「ながらみ」の容認は奨励される「あるべき姿」に自分には思える。ニューヨーク発の対話型鑑賞が教育普及としての鑑賞行為とするなら、会話型というべきしゃべりながら観る行為は、難しいことなんて言わず楽しもうとするやんちゃな姿勢だ。自分はその感じが好きだ。

全盲の白鳥さんは、盲人としての「あるべき姿」の枠に抗い、全盲の美術鑑賞者になった。美術館も今の「あるべき姿」の枠を脱ぎ捨て、新しい「あるべき姿」になれるのかと問われているように思えてならない。

Tokyo Art Research Lab ディレクター

森 司

わからなくてもいい。  
いや、わからないほうが、もっといい。  
そんな体験をいっぱい楽しんでほしい。

しゃべりながら観る。  
そういうスタイルが  
もっと広がってくれたら、  
とっても嬉しいよね。



*tarl* TOKYO ART RESEARCH LAB



こちらのQRコードより、本書  
のテキストデータをダウンロード  
できます。文字情報を音声化  
する際に活用ください。